

平成28年度 安曇野検定準備講座 3 山の日制定記念

「北アルプス登山道開拓者たち」

関 悟志 (市立大町山岳博物館 学芸員)

今年施行された国民の祝日「山の日」(8月11日)は、山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝する日です。こうした国の動きに先がけ、長野県では一昨年「信州山の日」(7月第4日曜日)を独自に制定しました。また、大町市では平成14年に「山岳文化都市宣言」を行い、山岳環境・山岳文化を大切にしながら、自然と人が共生するまちづくりに取り組んでいます。

このように山への関心が高まりをみせている現在、毎年、夏山登山シーズンを中心に多くの人びとが北アルプスへ登っています。

登山とは何でしょうか。人はなぜ山に登るのでしょうか。山と人はどのようなかわりを持ってきたのでしょうか。

ここでは、北アルプスに近代登山の道を拓いた小林喜作をはじめ、国内の登山史上に名を残した安曇野ゆかりの人物として、このほかウォルター・ウェストン、播隆上人をとりあげます。北アルプス登山の開拓者として知られる三人の人物像と実績について、関係史跡やかれらが使ったと伝えられる道具などの関係資料を交えてご紹介するとともに、その実像に迫り、各時代の登山史にかれらが登場することになった背景を探ります。

北アルプスにおける山と人とのかわりについて、三人を通して、時代ごとの特徴的な事象と今日までの変遷の一端にふれ、“北アルプスの山岳文化史”ともいえるその歴史の大きな流れをたどってみたいと思います。

1 北アルプスと人とのかわり

2 北アルプス登山の開拓者たち

(1) 播隆上人 — 槍ヶ岳登拝信仰を興した江戸後期の念仏行者 —

播隆(1786(天明6)~1840(天保11))は、1826(文政9)年に槍ヶ岳へ初めて登山し、1828(文政11)年に開山、1834(天保5)年には開闢としました。播隆は5回にわたる槍ヶ岳登山で、山頂に仏像を安置し、山頂付近に藁縄と木製の鉤で作った「善の綱」を取りつけました。

(2) 小林喜作 — 北アルプス表銀座縦走路「喜作新道」を開削した猟師 —

小林喜作(1875(明治8)~1923(大正12)年)は、北アルプスの大天井岳から西岳を経て東鎌尾根から槍ヶ岳へいたる縦走路の一部、いわゆる「喜作新道」を開削した地元山麓・穂高牧の猟師でした。明治末期からは登山者の案内や山小屋の開設にも協力しました。

(3) ウォルター・ウェストン — 「日本アルプス」の名を世界に知らせた英国人宣教師 —

W・ウェストン(1861年(文久元)~1940年(昭和15))は、明治から大正にかけ3回にわたり来日。日本滞在期間中、北アルプスなどに登りました。安曇野・大町にも登山の行き帰りにたびたび訪れています。ロンドンで出版された著書『日本アルプス 登山と探検』を通じ、W・ガウランド命名による「日本アルプス」の名は世界に知られるようになりました。

3 山とわたしたちの未来

北アルプスと人とのかかわり年代記 (北アルプス山岳文化史略年表)

日本史時代区分	西暦	和暦	後立山連峰を中心とした 北アルプスにおける山岳文化史(抄)	備 考	
先史時代 (紀元前900世紀以前〜7世紀末期)	旧石器時代 (紀元前92,000年前〜紀元前14,000年頃)			日本列島の旧石器時代(=人類の日本列島移住以降)	
	縄文時代(紀元前14,000年頃〜紀元前300年頃)		縄文前期、大町市平・上原遺跡。環状列石は、北アルプスの山々を信仰対象としてあがめて祭儀を行った共同祭祀場と推測される		
	弥生時代(紀元前300年頃〜250年頃)				
	古墳時代(250年頃〜600年代末期頃)			552年頃 仏教伝わる(一説に538年)	
古代 (6世紀末期〜12世紀後期)	飛鳥時代(592年〜710年、崇峻天皇5年〜和銅3年)	701年	大宝元年	佐伯有頼、立山権現の化身である鷹や熊に導かれ、立山開山と伝えられる(異説あり)	(この時代に倭国(倭)から日本へ国号を変えたとされる) 593〜622年 聖徳太子の摂政 645年 大化の改新(大化元年=年号の初め)
	奈良時代(710年〜794年、和銅3年〜延暦13年)				710年 平城京(奈良)に遷都
	平安時代初期〜末期(794年〜1167年または1179年、延暦13年〜仁安2年または治承3年)				794年 平安京(京都)に遷都
中世 (12世紀後期〜16世紀後期)	平安時代末期(160・70年代以前=平氏政権成立前、1167年または1179年〜1185年、仁安2年または治承3年〜元暦2年/文治元年)				
	鎌倉時代(1185年〜1333年、文治元年〜元弘3年/正慶2年)				1192年 源頼朝、征夷大將軍となり鎌倉幕府を開く 1334年 建武中興
	室町時代(1336年〜1573年、北朝:建武3年・南朝:延元元年〜元龜4年/天正元年) 南北朝時代(=室町時代初期)(1336年〜1392年、延元元年/建武3年〜元中9年/明德3年) 戦国時代(=室町時代中期〜安土桃山時代中期)1493(明応2)年〜1590(天正18)年	1584年	天正12年	芦峯中宮のうば堂にかつてあつたうば尊のうち、永和元年(1375年)の銘をもつものなど、うば尊十体ほどが芦峯寺に現存 大町市平の西正院大姥尊像、室町中期作と推定 永禄年間(1558〜70年)、寺嶋職定、越中商人の針ノ木越えルート使用を厳禁とする 佐々成政、浜松へ赴いて徳川家康と、三河吉良で織田信雄と対面。往路・復路ともに信州を通過(佐々成政による冬の北アルプス越えの伝承が伝わる)	1392年 南北朝の合一成る 1467〜77年 応仁・文明の大乱 1549年 ザビエル、鹿児島に來り、キリスト教を伝う

日本史時代区分	西暦	和暦	後立山連峰を中心とした 北アルプスにおける山岳文化史(抄)	備 考
安土桃山時代 (=戦国時代末期) (1568年以降=織田信長上洛以降) (1568年～1603年、永禄11年～慶長8年)				1590年 豊臣秀吉の統一 1600年 関ヶ原の戦い
近世 (16世紀後期～19世紀後期)	江戸時代(1603年～1868年、慶長8年～慶応4年)	1640年	寛永17年 前田利常、山廻り役を強化。北アルプスの大部分を加賀藩の「御縮山」として一般人の越境・入山を厳禁	1603年 徳川家康、将軍となり、江戸幕府を開く 1639年 鎖国 1688～1703年 元禄時代
		1712年	正徳2年 奥山廻り御用の者ら、盗伐であるとして針ノ木谷周辺で木屋に火を掛けて信州の杣らを追い出す	
		1726年	享保11年 立山室堂の北室が建立される(推定)	
		1771年	明和8年 立山室堂の南室が建立される(推定)	
		1775年	安永4年 信州高根新田村の友右衛門の倅、三吉、黒部奥山での盗伐の罪により加賀藩に捕えられた後、厳刑に付される 安永年間(1772～1780年)に、野口村庄屋・西沢九郎左衛門が葛温泉(葛ノ湯)の湯権を所有し、湯場の形を整えて経営をはじめ	1778年 ロシア船、蝦夷地に来る
		1787年	天明7年 信州を主な檀那場としていた芦峯寺の宿坊のひとつ宝伝坊の発願により、うば堂の脇立として聖観音菩薩像と地藏菩薩像の2体建立	1786年 ミッシェル＝ガブリエル・パカールとジャック・バルマ、モンブラン初登頂(オラス＝ベネディクト・ド・ソシュールの主導によるもので、その目的は自身の科学調査登山(学術登山))
		1801年	享和元年 小蓮華山山頂に大日如来立像の石造仏が祀られる 享和年間(1801～1803年)に起きた高瀬川の大洪水で葛温泉の木屋・湯屋などが流失	
		1806年	文化3年 この頃、野口村庄屋・西沢家、葛温泉の湯場の再開発を大規模に実施。湯屋と緒道具を整え、温泉へ至る本格的な道づくりを行う	
		1825年	文政8年 芦峯寺の宿坊のひとつ教蔵坊の発願により、地藏菩薩像建立	1825年 外国船打払令
		1828年	文政11年 播隆、槍ヶ岳頂上に阿弥陀如来など三体の仏像を安置(槍ヶ岳開山)。あわせて、穂高連峰に登り、六字名号碑を安置	
		1834年	天保5年 播隆、槍ヶ岳山頂を平らに広げ、先に安置した三体の仏像に、銅製の釈迦如来像を安置。それら四尊をもって槍ヶ岳寿命神とする。あわせて、槍ヶ岳山頂付近に藁縄製の「善の綱」を設置(槍ヶ岳開闢)	
		1836年	天保9年 江戸城西の丸復旧に必要な御用材伐採・搬出のため、加賀藩は信州側の杣を雇い、黒部峡谷一帯で木伐・搬出作業に当らせる。その差配を野口村庄屋・飯島善右衛門が行う	
		1864年	元治元年 上條嘉門次、松本藩の藩有林見廻役の助手になる	1854年 アルフレッド・ウィルス、ヴェッターホルン登山(「アルピニズム」(アルプスにおける)近代登山)のはじまりとされる 1854年 日米和親条約(神奈川条約)
	1867年	慶応3年 八方尾根八方池付近に地藏菩薩立像の石造仏が祀られる	1867年 大政奉還。王政復古の大号令	
近代	明治時代(1868年～1912年、明治元年～明治45年)	1870年	明治3年 山廻り役廃止	1868年 明治維新(五箇条の御誓文、明治改元)

日本史時代区分	西暦	和暦	後立山連峰を中心とした 北アルプスにおける山岳文化史(抄)	備 考	
近代 (19世紀後期～20世紀前期)	明治時代(1868年～1912年、明治元年～明治45年)	1874年	明治7年	内務省に地理寮が設けられて以後、政府による地形図作りのための国内全土を対象とした本格的な三角測量が行われる	
	1875年	明治8年	この頃(あるいは1873(明治6)年頃)、遠山品右衛門、黒部川平の右岸側に仮小屋(平の小屋)を建て、以後ここを拠点に夏はイワナ釣りをを行う		
	1876年	明治9年	ハインリッヒ・エドムント・ナウマン、蓼科山から諏訪湖、松本を経て大町を訪れる		
	1877年	明治10年	ウィリアム・ガウランド、槍ヶ岳と乗鞍岳登山		
	1878年	明治11年	アーネスト・メイスン・サトウ、A・G・S・ホースとともに大町から針ノ木峠越え		
	1880年	明治13年	開通社(頭取は信州野口村庄屋役三代目・飯嶋善造)、信越連帯新道(針ノ木新道)を開通		
	1880年	明治13年	上條嘉門次、明神池畔に小屋を持つ(当時は宮川あるいは明神の小屋。現嘉門次小屋)		
	1881年	明治14年	アーネスト・メイスン・サトウとA・G・S・ホーズの共編により『中部・北方日本旅行案内』として初版が発行(本文中に、W・ガウランドが飛騨山脈を称した呼称「日本のアルプス」が初めて活字にされる)		
	1882年	明治15年	開通社解散。針ノ木新道は廃道となる		
	1883年	明治16年	渡邊敏と窪田畔夫ら、白馬岳登山(白馬岳最初の近代登山)		
	1884年	明治17年	渡邊敏と窪田畔夫、烏帽子・鷲羽連峰方面などへ縦走登山		
	1890年	明治23年	この頃、百瀬新栄、旅館新築に着手(旅館は百瀬家の家印から「ヤマチョウ旅館」(後に通称「対山館」と称す	1889年 大日本帝国憲法発布	
	1894年	明治27年	志賀重昂、『日本風景論』を著す(「登山の氣風を興作すべし」と説き、当時国内唯一の登山案内書、登山技術解説書として、日本での近代登山興隆の氣運を高めるひとつのきっかけとなった書籍とされる)	1894～1895年 日清戦争	
	1896年	明治29年	ウォルター・ウェストン、『日本アルプス 登山と探検』を著す(ロンドンで出版されたこの本を通じ、W・ガウランド命名による「日本アルプス」の名は世界に知られるようになる)		
	1898年	明治31年	河野齡蔵ら、自身第1回目となる白馬岳登山(高山植物採集を目的としたもので、博物学者が白馬岳に登山した最初)		
	1904年	明治37年	志村烏嶺、自身第1回目となる白馬岳登山で葱平付近で新種2種の植物を採集(ヒメウメバチソウ、シロウマオウギ)	1902年 日英同盟成立 1904～05年 日露戦争	
	1905年	明治38年	日本山岳会(当時は山岳会)が結成される(初代会長・小島烏水)(東洋初の山岳会)		
	1905年	明治38年	松沢貞逸、白馬岳頂上の測量小屋跡の借地願いの許可を旧営林署から得る		
	1905年	明治38年	この頃、大町地域で初めてスケートが導入される		
	1907年	明治40年	この頃までに、遠山品右衛門、黒部川上流の東沢出合と下流の御山谷出合に仮小屋をもる(山林局から盗伐の監視役を委託されていたともいわれる)		
1907年	明治40年	この頃、前年に白馬岳頂上の測量小屋跡の石室に手を加えた松沢貞逸、本格的に山小屋として開業(白馬頂上小屋。現白馬山荘。北アルプスにおける近代登山者向けの営業山小屋第1号)			
1912年	明治45年	里見源次郎、高田でのスキー講習終了後に2台のスキーを譲り受けて大町中学校に帰校し、生徒にスキー技術を指導(大町地域における式—導入の初め)	1910年 韓国併合 1910年 加賀正太郎、ユングフラウ登山(日本人初のアルプス4,000m峰登頂)		

日本史時代区分	西暦	和暦	後立山連峰を中心とした 北アルプスにおける山岳文化史(抄)	備 考	
近代 (19世紀後期～20世紀前期)	大正時代(1912年～1926年、大正元年～大正15年)	1913年	大正2年	陸地測量部の北アルプス部分の5万分の1地形図が順次発売される(このほか、鉄道の整備、山小屋の開業、山案内人組合の発足、学校集団登山の普及、学生山岳部や社会人山岳会といった各種山岳団体の設立などがあいまって、いわゆる「大正登山ブーム」へ)	
	1914年	大正3年	この年から3年間、東信電気の依頼を受け、遠山兵三郎・富士弥兄弟、作業員を先導して東信歩道(後の日本電力によって開削された日電歩道へ繋がる)開削工事に従事(その間、平の小屋で越冬したという)	1914年 第一次世界大戦起り、ドイツに宣戦	
	1916年	大正5年	信濃鉄道が大町駅まで開通		
	1917年	大正6年	箆川谷大沢出合対岸に石積み置き屋根の大沢石室がつくられる		
	1917年	大正6年	百瀬慎太郎の主唱により、大町山案内者組合(現大町登山案内人組合)設立(日本で最初に結成された近代登山の山案内人の組織団体)		
	1919年	大正8年	松沢貞逸の主唱により、白馬山案内人組合が結成		
	1919年	大正8年	信濃博物学会とその姉妹団体である信濃山岳研究会の両団体を母体とし、信濃山岳会(代表・牧伊三郎)が設立		
	1919年	大正8年	長野県は、増加する登山者の利便と安全のため、県内10ヶ所に石室を設置する方針を決定(白馬岳、白馬鍾ヶ岳(後に翁ヶ岳種池に変更)、大黒岳、二ノ俣、槍沢、乗鞍岳、南アルプスの赤石岳、東駒ヶ岳(甲斐駒ヶ岳)、八ヶ岳の赤岳、志賀高原の岩菅山)		
	1920年	大正9年	田中阿歌麿、携帯式の帆布製ボートなどを運び上げ、白馬大池で湖沼調査		
	1921年	大正10年	百瀬玄三松・彦一郎親子の出資のもと、新道開削工事を前年に一応完了させていた小林喜作、喜作新道を本格的に完成させる	1921年 榎有恒、スイス・アルプスのアイガー東山稜(通称ミッテルレギ山稜)初登攀	
	1921年	大正10年	大町時代の教え子たちによって大町尋常高等小学校に建立された渡邊敏記恩碑の序幕式が行われる	1921年 イギリス隊、エベレストへの遠征登山をはじめめる	
	1922年	大正11年	小林喜作、殺生小屋(現殺生ヒュッテ)開業		
	1922年	大正11年	平村大出に高瀬川第1発電所完成		
	1923年	大正12年	大町駅から市街地を経由し高瀬川上流部沿岸の笹平まで、発電所建設用資材運搬のための電気鉄道軌道が完成	1923年 関東大震災	
	1923年	大正12年	伊藤孝一ら、雪の立山・針ノ木越え		
	1923年	大正12年	松尾峠でスキー登山中の板倉勝宣、遭難死(低体温症による凍死)		
	1923年	大正12年	棒小屋沢で出猟中の小林喜作・一男親子、遭難死(雪崩による圧死)		
	1924年	大正13年	尾入沢に高瀬川第2、笹平に第3、東沢に第4・第5発電所が完成		
	1925年	大正14年	百瀬慎太郎、大沢小屋建設		
	昭和時代初期 (昭和20年以前＝太平洋戦争を含む第二次世界大戦中以前)(1926年～1945年、昭和元年～昭和20年)	1927年	昭和2年	早稲田大学山岳部の部員11人、山スキー練習中に箆川谷で雪崩遭難、4人が命を失う(当時、国内の登山界において前例のない大規模な山岳遭難事故であったとともに、地元の大町においては警察署、消防組、山案内人組合などが組織的に遭難の救助・捜索活動を行ったはじめての事例といわれる)	
1927年		昭和2年	このころ、百瀬慎太郎ら、中山の表山に中山スキー場(旧大町スキー場)を開く。また、鷹狩山の西側の中腹に東山スキー場(その後、自然消滅)を開く		
1928年		昭和3年	大正期を通して行ってきた黒部峡谷の探検を1927(昭和2)年頃までにおおむね終えた冠松次郎、自身最初となる著書『黒部峡谷』を著す(黒部峡谷の紀行を初めて一般に紹介)		

日本史時代区分	西暦	和暦	後立山連峰を中心とした 北アルプスにおける山岳文化史(抄)	備 考
近代 (19世紀後期～20世紀前期)	昭和時代初期 (昭和20年以前=太平洋戦争を含む第二次世界大戦中以前)(1926年～1945年、昭和元年～昭和20年)	1928年 昭和3年	狩野きく能、正式に民宿をはじめ(翌1929(昭和4)年に「鹿島山荘」と民宿の名を定める)	1931年 満州事変起こる 1936年 立教大学山岳部、ナンダ・コート初登頂(日本人初のヒマラヤ遠征登山) 1937～1945年 日中戦争 1940年 日独伊三国軍事同盟締結 1941～1945年 太平洋戦争
	1929年 昭和4年	「大町スキー倶楽部」結成(初代会長・百瀬慎太郎)		
	1930年 昭和5年	百瀬慎太郎、針ノ木小屋建設		
	1932年 昭和7年	手塚順一郎、『山の寫眞のうつし方』を著す(日本初の本格的な山岳写真の手引書となる)		
	1934年 昭和9年	飛騨山脈一帯が中部山岳国立公園に指定される		
	1936年 昭和11年	三田旭夫、山岳遭難事故の防止と救助を目的に、伝書鳩を利用した山岳通信を行う中部山岳鳩協会を大町に設立		
	1936年 昭和11年	茨木猪之吉や丸山晚霞や足立源一郎ら画家総勢10名が創立会員となり、日本山岳画協会を創立		
	1937年 昭和12年	小谷部全助と森川眞三郎、鹿島槍ヶ岳荒沢奥壁・北稜積雪期初登攀		
現代 (20世紀前期～21世紀)	昭和時代中期・後期 (昭和20年以降=太平洋戦争を含む第二次世界大戦終結以降)(1945年～1989年、昭和20年～昭和64年)	1948年 昭和23年	松濤明と有元克己、槍ヶ岳北鎌尾根で遭難(翌年、ふたりは遺体となって発見。同時に見つかった手帳にはふたりが低体温症による凍死の直前まで綴った手記が残されていた)	1946年 日本国憲法公布
	1955年 昭和30年	岩稜会の3人パーティー、前穂高岳東面の岩場を登攀中、若山五朗が滑落し、ザイルが切断、墜死する(この遭難は単に滑落による山岳遭難事故として終息するのではなく、当時、麻ザイルにかかわって普及しはじめていたナイロンザイルの性能にまつわる論争へ発展し、やがて「ナイロンザイル事件」と呼ばれるようになる)	1953年 イギリス隊、エベレスト初登頂(登頂者はエドモンド・ヒラリーとテンジン・ノルゲイ)	
	1956年 昭和31年	井上靖、小説『氷壁』を書き、朝日新聞で翌1957(昭和32)年まで連載	1956年 日本山岳会、マナスル初登頂(「戦後の登山ブーム」へ)	
	1956年 昭和31年	関西電力による黒四建設工事、大町に建設事務所が設置され本格的にスタート	1956年 国際連合加盟成る	
	1958年 昭和33年	大沢小屋前で第1回「慎太郎祭」開催(以後、主催や会場などの改変を経て毎年開催。現在、針ノ木岳慎太郎祭として6月第1日曜日開催)		
	1958年 昭和33年	大町トンネル(現関電トンネル)貫通		
	1963年 昭和38年	黒部ダム完成		
	1963年 昭和38年	葛温泉、大町温泉郷へ引湯される	1964年 全日本山岳連盟、ギャチュンカン初登頂(日本山岳会以外の社会人山岳会による日本最初期の海外遠征登山での登頂成功)	
	1967年 昭和42年	前年1966(昭和41)年に白馬岳頂上直下に建立された松沢貞逸のレリーフ序幕式を兼ね、第1回「貞逸祭」開催(現在、毎年5月末開催)		
	1969年 昭和44年	集中豪雨による高瀬川の大洪水で葛温泉が流失		
	1971年 昭和46年	黒部立山アルペンルート全線開通	1970年 日本山岳会、エベレスト登頂(日本人初のエベレスト登頂(世界第6登))	
	1975年 昭和50年	葛温泉、木崎湖畔へ引湯される		
	1981年 昭和56年	高瀬川に七倉・高瀬の両ダム完成		
	1986年 昭和61年	高瀬川に大町ダム完成		
平成時代(1989年～、平成元年～)		「深田久弥選 日本百名山 登山」ブーム 「山ガール」ブーム	1998年 長野冬季五輪 2011年 東日本大震災。東電福島第一原発事故	

注 この年表は、後立山連峰とその山麓を中心に、市立大町山岳博物館の常設展示「山と人 北アルプスと人とのかかわり」で取り扱っている事柄や各年代における主な出来事などを記した。そのため、当該地域の登山史を含む山岳文化史に関する全て詳細な記録を網羅するような年表とはなっていない。この地域において先史時代から山と人が織り成してきた歴史の大きな流れをつかむため、各時代の特徴的な事象の概略を、過去から現在までの山岳文化のクロニクル(年代記、編年史)としてまとめたものである。備考欄には同時代の出来事から関係する主な事項などを参考までに記した。

なお、本表「日本史時代区分」は一般的な区分を参考までに示したものである(各時代の始期・終期に関しては諸異説あり)。

【主要参考文献】市立大町山岳博物館編／黒野こうき監修／播隆・槍への道程—善の綱をたどれば—(市立大町山岳博物館、2005)
市立大町山岳博物館編『北アルプス 山人たちの系譜—嘉門次、品右衛門、喜作 登場の背景』(市立大町山岳博物館、2007)
市立大町山岳博物館編『北アルプスと人とのかかわり—人文科学系 展示解説書—』(市立大町山岳博物館、2014)